

## 慶應 SFC 学会 (D)研究調査・フィールドワーク成果報告書

政策・メディア研究科修士課程 2 年 82225232 西中奈々

### 1. 活動概要

#### ● 活動名称

バスク語ニュースピーカー候補生にとってのバスク語学習とは何か～全寮制成人バスク語教育のエスノグラフィー～

#### ● 活動年月日

2023 年 10 月 2 日～2024 年 2 月 2 日

#### ● 実施場所

スペインバスク自治州ギプスコア県ラスカオに所在する成人バスク語全寮制学校マイスピデ

### 2. 活動内容

スペインバスク自治州ギプスコア県ラスカオという小さな村に所在する成人を対象とした全寮制バスク語学校マイスピデで 4 か月フィールドワークを行った。この全寮制バスク語学校では 1 日 6 時間半バスク語を学習するインテンシブコースを受講してバスク語を学習しながら、自分の学習過程や学校での生活、学生や先生の交流を観察し、フィールドノートに記述した。

この学校のインテンシブコースはバスク語能力別にクラスが分かれていた。私は日本での学習経験があったが、経験が浅く、また現在一からバスク語を学習する人たちはどのような人なのか、またどのような目的をもって学習を始めるのか調査するために、ヨーロッパ言語共通参照枠で「基礎段階の学習者」である A1 のレベルから学習を開始し、並行してフィールドワークも開始した。コースは 4 週間でコースが設計されており、コース終了後には毎回確認テストを実施し、合格した学習者は翌月から 4 週間次のレベルでの学習を開始するという仕組みになっていた。私は 4 か月間のフィールドワークの結果、ヨーロッパ言語共通参照枠で「基礎段階の学習者」の A1 そして次のレベルの A2 の言語レベル資格を取得した。

学校のスケジュールとしては、7 時 45 分から 8 時 45 分まで朝食、そしてその後 9 時から 13 時半まで授業を行い（その間 30 分休憩がある）、13 時半から昼食を取り、16 時まで休憩時間、そして午後の授業が 16 時から 18 時半までというスケジュールであった。授業終了後は各自の自由時間となり、20 時から夕食の時間が決められているほか、その他自由時間となっていた。このスケジュールは月曜から木曜日まで続き、金曜日は午前中の授業のみ行い、その後は週末休暇となった。

### 3. 活動成果とその活用

今回の活動の成果として、大きく二つが挙げられる。一つは就労とバスク語の関係についてである。私がフィールドワークを行った全寮制バスク語学校の生徒の大多数は、就労を理

由にバスク語を学習している人であった。バスク自治州ではスペイン語と共にバスク語を公用語となっているため、公的サービスを提供する機関（役所、病院等）で就労する場合はヨーロッパ言語共通参照枠 6 段階レベルの内、第 4 段階レベルである B2 の取得が義務付けられ、また学校教員として就労する場合は第 5 段階レベルである C1 の取得が義務付けられている。私と同じ初期段階のレベルから受講した学生の中には、役所で働く資格を保有しているもののバスク語能力資格を保有していないため就職することができず、私と同じタイミングでバスク語学習を始めた学生が 1 名いた。また、この学校では初心者コースのみならず、中級コース、上級コースも開講されており、これらのコースを受講している学生のほとんどは上記で示した部門での就労を希望し、バスク語学習に取り組んでいる学生だった。彼らは全寮制学校でバスク語学習と語学能力試験対策を行っていた。この状況から、バスク自治州における成人バスク語教育は、就労を取り巻く言語政策に大きく影響していることが明らかとなった。

二つ目の成果としては、学習者同士の交流が盛んであることだ。全寮制学校では、言語能力別にクラスが分かれているものの、学生寮の部屋割りはコース関係なく割り振られていたり、食事の際の席は自由席のためその時々になくなった人達と会話をしながら食事を楽しむことが日常であった。そのため休憩時間や、自由時間はクラスメイトや他のクラスの学生と近くのカフェで話をしたり、散歩をしたり、また勉強会を開いたりすることで学校生活を勉強だけではなく、人間関係の形成の場としても成り立っていた。バスク語学習という同じ一つの目的で集まった人々が、様々な場面で人々と交流し関係性を築いていく、コミュニティを形成していくことに、今回の活動を通して注目した。

これらの二つの成果を踏まえた今後の活用として、まずバスク語と言語政策に関して、この二つの関係性について詳しく調査を行う。少数言語復興の観点からも、このバスク自治州におけるバスク語と言語政策の関係性を明らかにすることは重要なことだと考えている。今回の活動で築いた人脈や情報を活用して今後も調査を継続していく。また、今回の活動で見えてきた学習だけではない、全寮制バスク語学校の姿、そしてそこで学習する人々とそのコミュニティ形成に焦点を当て、成人バスク語学習者を「何らかの共通した取り組みを中心に集まった人々の集団」実践共同体として捉え、バスク語学習における実践共同体をテーマに研究を進めていこうと考えている。